白石和紙と島崎藤村と

～名掛丁あれこれ～

名掛丁東名会　梅津恵一

毎年三月になると奈良東大寺の二月堂で「お水取り」が執り行われる。この修二会（法会）のメインイベントでは、邪気を払うために、僧侶の持つ松明の炎が火の粉をまき散らしながら暗い回廊を駆け巡る。その映像は、奈良に春の訪れを告げる風物詩としてニュース等で放映される。この修二会では、宮城の白石和紙工房で作られた和紙を僧侶が着衣として使用していたことをご存知だろうか。

白石和紙は、江戸時代から明治時代まで白石の特産物として盛んに作られていたが、いつしか途絶えてしまった。それを昭和に入り、地元の遠藤忠雄さんが苦心の末に復活させた。白石和紙は強度と耐久性に優れていたので、1943 年には宮内省に重要記録紙用として採用され、1945 年の太平洋戦争終結の際に戦艦ミズーリ号で調印された降伏文書に用いられた。また軽くて保温性にも優れていたので、紙衣や紙布にも用いられ、1957 年からは東大寺の修二会用の着衣に採用された。このような由緒ある白石和紙とは知らずに、わが町内会（名掛丁東名会）は白石和紙との縁を深めることになった。

1995 年秋、名掛丁町内会日帰り旅行先は白石方面だった。その際に、遠藤さんの和紙工房に立ち寄り展示品を拝見した。その中に、ミヤギノハギとフウセンカヅラを対にして和紙に漉き込んで作った「風炉先屏風（ふろさきびょうぶ）」が展示してあった。思わず「これだ」と、心の中で叫んでしまった。

仙台駅東口界隈は街の再開発が著しいのだが、かつて、この名掛丁に島崎藤村が下宿し、日本文学史に残る「若菜集」を世に出したことから、わが町内会では、藤村とその偉業を「まちおこし」の旗印にしようと考えた。そこで町民有志一念発起して、1991 年に木曾馬籠（きそまごめ）の藤村記念館を表敬訪問し交流を始めた。1994 年には藤村記念館より友好の証として、藤村が愛したミヤギノハギを株分けして頂いた。さらに 1997 年の「藤村記念館開館 50 周年記念式典」開催に合わせ、藤村記念館への寄贈品をミヤギノハギで作れないものかと模索していた。そんな折に、和紙工房で「風炉先屏風」を目にし、ミヤギノハギを和紙に漉き込み、藤村の詩を書にして贈るアイデアが浮かんだ。町内会の賛同も得られ、白石和紙工芸家の遠藤さんに「町内に藤村ゆかりのハギがあるので花を和紙に漉き込んでほしい」とお願いしたところ、ご快諾頂いた。また、和紙に書く詩については、藤村の存命中に建立された若菜集『草枕』詩碑の二節を思い描いていたので、同時にフウセンカヅラを漉き込んだ和紙の制作もお願いした。

翌年、見事な和紙が出来上がったが、次は揮毫（きごう）の依頼先が思案の種となったので、藤村研究の第一人者である藤一也先生に相談すると、「文学に造詣が深く、書を得意としている藤井仙台市長(当時)にお願いしたらどうか」さらには、「来年仙台文学館が開館するので、もう一対の和紙を藤村記念館の藤村ゆかりの方に揮毫して頂き、双方で交換したら如何だろう」と素晴らしい助言を頂いた。早速その提案を藤井市長と藤村記念館の蜂谷館長(当時)に申し出ると、お二人とも快く引き受けて下さった。ただ残念なことに、藤村記念館では揮毫する適任者が馬籠を離れてしまい、仙台文学館への寄贈は実現には至らなかった。藤井市長に揮毫して頂いた書は町内の額縁店で額を制作し、式典前に記念館に発送した。

11 月 15 日に開催された式典には名掛丁東名会を代表して菅原、石川の両副会長が参列し、記念品が御披露された。そのご縁で藤村記念館との交流が一層深まり、2002 年には藤村記念館の協力で仙台文学館の「島崎藤村展」が実現した。さらに 2004 年には念願の藤村下宿跡地が「名掛丁藤村広場」として整備され、記念碑（藤井市長が揮毫）が建立された。その側には頂戴したミヤギノハギが植樹された。記念式典には藤村記念館から館長と副館長のお二方が参列して、藤井市長と共に記念に残る祝辞を頂戴した。

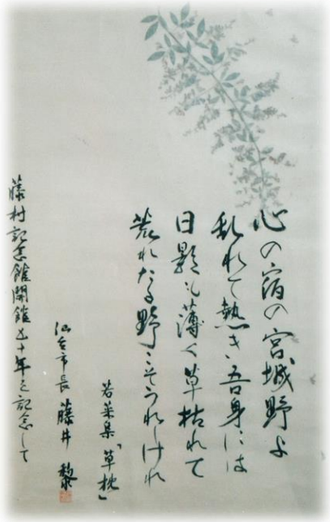
寄贈した二幅の藤村の書はその後、藤村記念館の展示室にて一般公開されている。藤井市長にその話を申し上げると、「機会があれば私も是非藤村記念館を訪ねてみたい」と仰っていた。ところが長年にわたる市長職の激務のせいか退職なされて 5 年後に亡くなられ、その願いが叶わなかったことは無念であられたと思う。

奈良東大寺の「お水取り」の季節がやってくるたびに、白石和紙や藤村にまつわる名掛丁界隈のことが懐かしく思い出される。

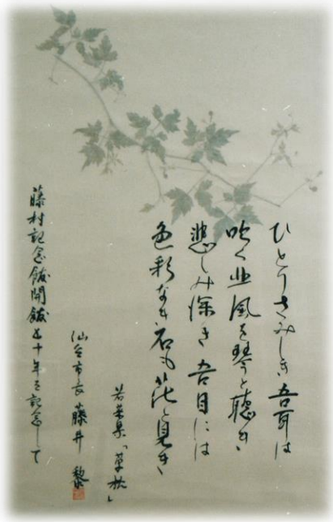
【参考文献】
『島崎藤村「若菜集」の世界』911.5 シ
藤 一也／著 万葉堂出版 1981.2
『若菜集』島崎 藤村／著 911.5 シ 日本図書センター 2002.12
『紙の手技』S585 カ 笹気出版 2003.3
『名掛丁・東名会
～きのう・きょう・あしたⅡ』S291 ナ
名掛丁東名会／編集 2021.7

①藤村記念館のミヤギノハギ

※写真提供①②③　梅津氏



②ミヤギノハギ



③フウセンカヅラ